

「出向いて行きましょう」（教皇フランシスコ 使徒的勧告 「福音の喜び」）

洗礼を受け、神の民のすべての成員は宣教する弟子となりました（マタイ 28・19 参照）。教会の中の役目がどんなものであっても、また信仰の素養に差があっても、洗礼を受けた一人ひとりが福音宣教者なのです。だから資格のある者だけがそれを進め、残りの信者はこれを受け取るだけと考える福音宣教の図式は適当ではありません。新しい福音宣教は、洗礼を受けた一人ひとりが新たな主人公であることを意味しなければなりません。（120）

何も変えることはできないのだから努力しても無駄だとの思いから、福音宣教に身をささげようとしなない人がいます。彼らはこう考えます。「何で自分の快適さや楽しみを退けなければならないのか。大した成果も見られないのに」。こんな考えをもっては宣教者になれません。こうした態度は、自己を閉ざしたままでいたいのための、悪質な言い訳そのものです。快適さにしがみつき、怠惰なままで、満たされないことを嘆き悲しむ、むなしい利己主義者でいたいのです。これは自己破壊的な態度です。なぜなら、「人間は、希望なしに生きられません。希望がなければ人生は無意味になり、人はそれに耐えることはできません。※」そう考えてしまうときには思い出してください。イエス・キリストは罪と死に打ち勝ち、力に満ちておられるのです。イエス・キリストはまさしく生きておられます。「キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄」になってしまうのです。福音は、説教のために出掛けた最初の弟子たちの様子を伝えています。「主は、彼らとともに働き、彼らの語ることばが真実であることをお示しになった」（マルコ 16・20）。

（275） ※第二回ヨーロッパ特別シノドス「最終メッセージ」 1

出向いて行きましょう。すべての人にイエスのいのちを差し出すために出向いて行きましょう。ここで、ブエノスアイレスの教会の司祭と信徒に何度も申し上げたことを、全教会のために繰り返します。わたしは、出て行ったことで事故に遭い、傷を負い、汚れた教会のほうが好きです。閉じこもり、自分の安全地帯にしがみつくと気楽さゆえに病んだ教会よりも好きです。中心であろうと心配ばかりしている教会、強迫観念や手順に縛られ、閉じたまま死んでしまう教会を望みません。わたしたちが憂慮し、良心のとがめを感じるべきは、多くの兄弟姉妹が、イエス・キリストとの友情がもたらす力、光、慰めを得られず、また自分を迎えてくれる信仰共同体もなく、人生の意味や目的を見いだせずにいるという事実に対してです。過ちを恐れるのではなく、偽りの安心を与える構造、冷酷な裁判官であることを強いる規則、そして安心できる習慣に閉じこもってしまっていること、それを恐れ、その恐れに促されて行動したいと思います。外には大勢の飢えた人がいます。そして、イエスは倦むことなく、たえず教えておられるのです。「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」（マルコ 6・37）。（49）